

社会科

1 育成したい「思考力」

社会的事象について、事象が内包する事実を既有経験を基に比較・類別して特色をとらえたり、その特色から問いを作り、時間的・空間的・公的視野の広がりの中で事象相互を関係付け、その意味や価値をとらえたりして、社会の全体像を再構成する力

社会科は、私たちが生きる現実社会を理解し、公民的資質の基礎を養うことを究極のねらいとする。よって、授業を窓に社会の姿が分かる授業づくりが求められる。そのためには、一つ一つの社会的事象の目に見える部分を知ることにとどまらず、目に見えない事象の意味や価値を理解し、社会の姿を総合的に判断し、子ども自身が「私たちの生きている社会はこうなっていた」と思い描く必要がある。この見えるものから見えないものをつかむ過程で働くのが上記「思考力」である。

なお、社会科では、問題解決の過程に沿って「思考力」を三つの層に分けて述べる。

(1) 比較・類別する思考

比較

追究対象である社会的事象が内包する事実を、他の事象が内包する事実と比べ、共通性・差異性を見出すことで事象そのものの特色を明らかにする。

類別

追究対象である社会的事象が内包する事実を、観点ごとに分類することで、その事象の特色を明らかにする。

「事象が内包する事実を既有経験を基に比較・類別し、特色をとらえる」とは、対象となる事象が何で、他とどこが同じで何が異なるのか、といった事象そのものをとらえることである。具体的には、事象の目に見える部分を丹念に調べ、事象を構成する事実や関連する事実を比べたり、事実を集めて仲間分けしたりすることを通して、事象の特色を明らかにすることを指す。その際には、一つ一つの事実が子どもの経験と結び付いた状態で理解されていることに留意することが必要である。【第1の層】

第3学年「たんけん 発見 附坂小のまわり」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

バスの路線図や案内標識、交通の様子を手がかりに、他の地域と自地域を比較し、場所によって様子が異なることを見出す力

本実践では、学校の東側と西側の2本の道の様子を比較した。東側「学園通り」は、周辺に小・中・高校が点在し、主に駅からの徒歩での通勤、通学に使われている。西側「貞光線」は、道幅が広く大きな店舗が隣接し、車の往来も多く他の町との幹線道路としての役割を果たす。交通の様子に着目して目に見える事実を比較することを通して、「どちらも案内標識がある」といった共通点からは「目的地と自分を結ぶ」という道のもつ普遍的な役割を、「案内されている内容が異なる」といった差異点からは「道によって結ぶ目的地が異なる」というその道ならではの役割に気付かせた。この共通点、差違点を明らかにする際に働くのが比較する思考である。



【同じ所、異なる所を探す】

(2) 関係付ける思考

「特色から問いを作り、時間的・空間的・公的視野の広がりの中で事象相互を関係付ける」とは、第1の層でつかんだ特色には、意味や価値があるのではないかと考え、学習問題を作り、時空間、立場を広げていく中で、目に見えないその他の事象との関係を探っていくことである。社会的事象の構造は複雑であり、他の多くの事象とも関係し合って成り立っている。「その意味や価値をとらえる」とは、こうした事象の機能、成因、影響等を明らかにすることである。

社会的事象に特色が現れるのは、社会を構成する人間の営みの結果だからである。そこには必ず「よりよくしたい」という人々の願いに基づく工夫や努力があり、動機や改善策となった事象が存在する。その関係する事象を時空間、立場を広げて探っていく、事象相互の関係を「原因と結果」「目的と手段」等のように関係付け、その意味や価値を明らかにするのである。【第2の層】

○ 「時間的」な視野の広がりの中に存在する様々な事象と関係付ける

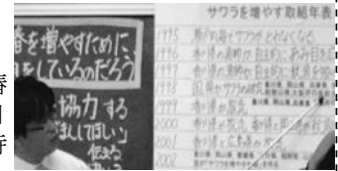
追究対象である事象が存在している「時」から、過去や現在、未来へと時間的に広げていく中に存在する様々な事象との関係を考える。

第5学年「これからの食料生産 ―瀬戸内鱸の資源管理―」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

激減した瀬戸内鱸の資源回復について、時間的・空間的・公的視野を広げ、どのような取組によって資源が回復してきたのかを予想し、資料から長期的展望に立った広域的な協力体制によって「みんなで育て、あとでとる」取組が、鱸資源を増やしたことをとらえる。

瀬戸内鱸の激減という課題を今すぐに解決することは難しくとも、時間を広げ、未来において解決するために何ができるか、と考えた。「鱸の漁獲量の推移」グラフと「鱸を増やす取組」年表をつなぎ、鱸資源が回復してきたこと（結果）と、鱸の稚魚を放流したり秋漁を自粛したりしてきたこと（原因）とを関係付けた。その際働くのが、時間を広げて結果と原因を関係付ける思考である。



【時間を広げて考える】

○ 「空間的」な視野の広がりの中に存在する様々な事象と関係付ける

追究対象である事象が存在している「位置」から、空間的に広げていく中に存在する様々な事象との関係を考える。

瀬戸内鱸が激減したという香川県の課題を、香川県内で解決することは難しくとも、空間を広げ、広域の協力体制があればできることがあるのではないかと考えた。「鱸の回遊範囲」と「鱸を放流している所」の地図資料をつなぎ、鱸資源が回復してきたこと（結果）と香川県の取組が瀬戸内海沿岸11府県に広がり、みんなが協力して鱸の稚魚を放流してきたこと（原因）とを関係付けた。その際働くのが、空間を広げて事象同士を関係付ける思考である。



【空間を広げて考える】

○ 「公的」な視野の広がりの中に存在する様々な事象と関係付ける

追究する社会的な事象を、「自分とのかかわり」（私）という立場から、「社会全体とのかかわり」（公）という立場に視野を広げ、立場を転換していく中で、そこに存在する事象との関係を考える。

瀬戸内海の鱸が激減したという漁業者の課題を、漁業者だけの取組では解決が難しくとも、立場を変え、国や県の立場から何ができるか、と考えた。漁業者が獲った鱸を県の船が受け取り、国の栽培漁業センターの方が船上授精する連携プレイについてのニュースを基に、鱸の資源が回復してきたこと（結果）と香川県の漁業者の自主的な取組が、県を動かし、国をも動かしたこと（原因）とを関係付けた。その際働くのが、公的視野の広がりの中で立場を変え、事象同士を関係付ける思考である。



【立場を変えて考える】

（3）再構成する思考

「社会の全体像を再構成する」とは、第2の層でつかんだ事象の意味や価値を、子どもが思い描く社会の全体像の中に位置付けることである。子どもは、これまでの生活経験や既習事項から子どもなりに現実社会を解釈している。それは、学ぶ前から断片的な情報を材料として子どもなりの社会についての概念を構成していると言えるのである。第1、第2の層を通して、その解釈を教材からの学びや友達との学び合いの中で磨き合い、修正したり、より妥当性の高いものに組み替えたりしていくことを「社会の全体像を再構成する」と表現した。【第3の層】

さらに、「第4の層」として、価値判断、意思決定の層を設定する場合もあるが、「思考力」以上に「判断力」が問われるため、ここでは省略する。